フィールドノート
Field Note

銃・馬具・天然塩

モンゴル語由来の借用語からみえてくる東北チベットにおける文化接触

海老原志穂 えびはら しほ / 日本学術振興会特別研究員RPD（AA研）、AA研共同研究員

中央チベットと東北チベットにはともにわずかではあるがモンゴル語由来の語がみられる。どのような語に借用がみられるのか、観察してみると、中央チベットとは異なる、東北チベット特有のモンゴルとの関わりが浮かびあがる。

東北チベットの牧畜文化を追い求めて

共同研究の仲間とともに東北チベット（中国青海省）の牧畜民のもとに通うようになって8年が経つ。当初、私にとってはほぼ未知の領域であったチベット牧畜民たちの生活も、毎年通ううちに徐々に身近なものとなってきた。ヤクや羊、馬といった家畜の年齢、雌雄、毛色や模様、角の形を組み合わせて呼び分ける識別語彙や、テントの部位、乳加工体系、肉の部位、糞や毛や皮の加工に関する名称など、共同研究で収集した牧畜文化にまつわる民俗語彙は、『チベット牧畜文化辞典』（星泉他編）として結実し、現在はその英語版の編集作業に取り組んでいる。

研究をはじめた当初から、東北チベットの牧畜文化が、近接する牧畜文化圏であるモンゴルからどれくらい影響を受けているかは、非常に気になるテーマであった。東北チベットは、7世紀にはモンゴル系民族とされる吐谷渾（とよくこん）に対する辺境防衛の拠点として、17世紀中頃からは清国やモンゴル諸部族勢力と中央チベットとの境界として位置づけられてきた。筆者らがフィールドワークを行なっている青海省東部ツェコ県の隣にある河南県には、17世紀にチベット仏教ゲルク派の要請を受けて移り住ん

ツェコ県の南に位置する河南県にある黄河南蒙古歴史博物館。建物の中央部はモンゴル式のテント「ゲル」をかたどっている。

＊記載のない写真はすべて筆者撮影。

できたモンゴル系牧畜民（オイラト）の一部族の末裔が暮らしている。また、青海省のその他の地域にもモンゴル系の人々が住んでいる、または、かつて住んでいた場所がいくつかあり、その結果、現在でも青海省にはモンゴル語由来の地名が多く残っている。

家畜のための「塩」

筆者が最後に現地を訪れたのは2019年8月のことだ。その調査の折、草原にまっすぐ伸びた道を車で進んでいた時に、現地出身の運転手のはからいで、地元で有名なある場所に立ち寄ることになった。舗装された道路をはずれて横道に入るとほどなくして、崖の途中が白くなっている景色がぼんやりみえてきた。その場所は、昔からある天然塩の採掘場だった。塩というより、「ナトリウム化合物」と表現したほうが正確かもしれない。その崖のふもとからは、ミネラルを多く含むナトリウム化合物が今でも湧き出し、尽きることがないという。白い結晶を指にとってなめてみると、しょっぱさはあまり感じず、ミネラルの苦味とともにひんやりとした感覚があった。この塩は人間が食べるものではなく、家畜に食べさせるためのものである。地元の牧畜民たちのみが天然塩を採ることを許され、一年に一度、大きめの袋いっぱいに塩をつめて持ち帰り、時期をみはからって、石ころなどが落ちていない草地にまいて家畜になめさせる。家畜たちは、地面の黒土がみえるまでその塩をなめとる。塩を食べさせないと、交尾をしなくなるなど家畜の生育に大きな影響が出たり、時には家畜の生死に関わることもあるという。天然塩が手に入らない地域では買ってきた塩を与えているが、もちろん栄養価において天然塩のほうがはるかにすぐれているとのこと。

ところで、チベット語で「塩」は一般的に、「ツァ」というが、先に述べた「天然塩」は東北部のチベット語で「ホジョル（hodʑor）」と呼ばれている。この「ホジョル」という単語は、実はモンゴル語からの借用語だ。モンゴル語での発音は「ホジル（qujir）」。「塩類」や「ソーダ」などと訳され、やはり、採掘して家畜に与えたり、皮なめしに利用したりするものなのだそうだ。この「ホジョル」の例以外にも、現地調査や論文などから、いくつかのモンゴル語由来の単語が使われていることがわかったので以下に紹介しよう。

「馬具」、「テント」、「ラクダ」そして「銃」

東北チベットの現地調査からは、馬に乗る際に鞍の下に敷く「クッション状の鞍敷き」が「ホム（hom）」と呼ばれ、これがモンゴル語の「ホム（qom）」に由来していることがわかった。また、東北チベットの中でもモンゴル式テントを使用している地域では、テントの部位名称（天窓、柱、木組みの壁）に、ラクダを飼育している地域ではラクダの「こぶ」や「鼻」といった身体部位、そして、成長段階別名称の一部に、それぞれモンゴル語由来の単語が使われていることが文献に書かれていた。

以上はいずれも牧畜文化に関連する単語であるが、牧畜地域だけでなく東北チベット全体で広く使用されている借用語もある。それは、「銃」という単語である。東北部のチベット語で「銃」は「ウ（wu）」と呼ばれているが、これは中国語の「砲（pao）」がモンゴル語に「ブー（buu）」という語形で取り入れられ、それをチベット語が借用したものであるということが、各言語の音韻対応からわかっている。銃は、紛争の際の武器としてだけではなく、狩猟や家畜の天敵である狼の捕獲にも使われてきた。

中央チベットでは

一方、中央チベットにおいては、上述のモンゴル語由来の牧畜文化語彙はみられない。「銃」に関して言えば、「メンダ（me̱+ntā 火＋矢）」というチベット語の固有語を複合した表現

ツェコ県にある天然塩の採掘場。

天然塩を採りにきた近所のチベット牧畜民。

天然塩の結晶。

河南県のレストランのホーショール（ひき肉を小麦粉生地に包んで揚げたモンゴル料理）。

ヤクや馬などの家畜には一年に一度、塩を舐めさせる。

鞍の下に敷かれている鞍敷き「ホム」（撮影：岩田啓介）。

で呼ばれている。また、モンゴル語からの借用語としては、東北チベットでも使われている行政・交通・外交に関するものや、役職・宗教上の職名の他には、「ボタン・服の留め具（トプチ）」、「タオル」、「靴下」といった外来品、そして「医者（アムチ）」という単語などがみられる。チベット人とモンゴル人が生活圏を接してきた東北チベットに対し、中央チベットにおいて彼らは、「寺と施主」の関係でつきあっていた。つまり、チベット仏教を信仰し、教えと仏の加護を求めていたモンゴル人は、チベットの寺や僧侶を保護し、経済的に支え、時には軍事的なサポートも行っていたのである。そのような関係性の中で、中央チベットにおいては、モンゴル語やモンゴル風の物が社会的権威の象徴であったことが、ジグメノルブ・武内紹人による共著論文（「チベット語におけるモンゴル語の借用語とその社会文化的含意」、1991年、原文は英語）でも指摘されている。

同論文から、中央チベットの人々とモンゴル文化との関わりがみえてくる。モンゴルの民族衣装の服の留め具である「トプチ」は、左右の前身頃を合わせて帯でしばって着るチベット服にはついていない新しいものだった。そして、留め具自体も社会的プレステージの高いものとみなされ、それを指す単語にモンゴル語が使われた。この「トプチ」のように文化的新奇性の高いものが借用されるだけでなく、「医者（アムチ）」のような例もある。チベットでは当時から医学が伝統的学問のひとつとして確立しており、モンゴルよりも技術的に発達していた。しかしながら、中央チベット語の「医者」という単語にモンゴル語由来の「アムチ」が使われるようになった事実から、単に技術的な優位性のみにもとづいて借用が行われていたわけではないことがわかる。

東北チベットにおける文化接触

外来品や医者といった文化的語彙の借用が目立つ中央チベットに比べ、東北チベットでは、上でも述べたように牧畜文化に関するものや、銃といった実用的なものの借用が特徴的である。また、中央チベットでモンゴル語が社会的威信を持っていたのとは異なり、東北チベットにおいては、チベット語とモンゴル語どちらの威信が高いということはなく、それぞれの民族の言語として対等な関係にあった。牧畜文化語彙や銃といった単語の借用からは、高い牧畜技術を持ち、モンゴル帝国時代から銃を手にしていたモンゴルの人々と東北チベットの人々との交流の様子がうかがい知れる。 FP